

児童の規範意識の育成

－規範に対する考えの深化と自己有用感の獲得を通じて－

教職実践応用領域 学級づくりモデル
脇田 健太郎

I はじめに

1 児童をとりまく社会情勢と規範意識

少子化や核家族化、都市化、情報化等の社会の変化や人間関係や地域におけるつながりの希薄化など、児童を取り巻く環境は大きく変化している。こうした社会情勢の変化から、児童の規範意識の低下が懸念されている。

実際に、学校教育法（平成19年一部改正）において、規範意識を育てることが、義務教育の目標として述べられている。また、文部科学省（2012）は、規範意識などの確立の根底となる道德教育の一層の充実を求めている。このように、今日の教育において、規範意識の育成が大きな課題だと言える。

文部科学省（2012）によると、規範とは「人間が行動したり判断したりするときに従うべき価値判断の基準」であり、規範意識とは「規範を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識」と定義している。

なお、群馬県総合教育センターの木暮（2012）によると、規範意識の重点項目として、道德の内容項目における「基本的生活習慣」「規則尊重・公德心」「勤勉努力・自律」「公平公正・正義」「思いやり」「役割自覚・責任」の6項目があげられる。

2 本校の概要と児童の実態

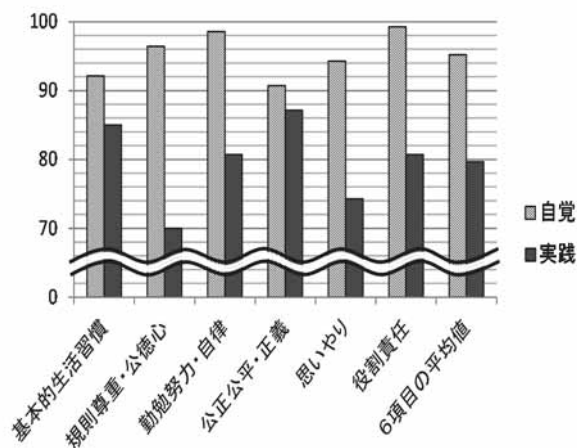
本校は名古屋市の南西部に位置する。国道一号線が東西に、名古屋と岐阜を結ぶ幹線道路が南北に走っており、その道路沿いには飲食店や娯楽施設が存在する。しかし、少し中に入れば、町工場や昔ながらの銭湯、食堂が残っている地域もあり、古くからの住宅街である。

しかし、児童の家庭状況をみると、両親が共働きの家庭や、ひとり親の家庭が、合わせて6割ほどあり、児童と保護者が接する時間や、家庭と地域がつながる時間の減少が懸念される。

また、昭和30年代には2000人近く在籍していた児童も、現在は500人（過去に分校ができたが、そちらの児童数を合わせても830人）であり、少子化の影響を受けていると言えよう。

本校における規範意識について、群馬県総合教育センターの木暮（2012）の作成したアンケートを参考に、2015年4月、筆者の担任する学級で調査した。

【資料1 規範に関するアンケート結果(2015年4月)】



このアンケートは先に述べた規範の6項目について、正しいと思うか（自覚）、守って過ごせているか（実践）を調査したものである。

調査の結果を見ると、児童は規範が大切だと思っても、望ましいとされる行動が取れていなかった。中でも、規則尊重・公德心や思いやりの項目は、自覚と実践の差が大きいと共に、守って行動できていると考える児童の数が少なかった。

また、なぜ規範を守ることが大切かを質問すると、児童からは「守らないと大人に叱られるから」という回答が返ってきた。中には、特に思い浮かばないと言って、空欄のままの児童も多数おり、仕方なく規範を守っている児童が、一定程度存在することが分かった。

そこで、児童の道德性の段階を小寺（2001）による分類を参考にし、以下に述べる段階に分けられると考えた。なお、発達段階は年齢とともに上がっていくものであり、小学校高学年では第3段階にいたることが望ましいと考えられている。

【資料2 道德性の段階】

<第1段階>

仕方がないから、規範を守る

(守らないと叱られる・守った方が自分に利益がある)

<第2段階>

人に認めてもらいたいから、規範を守る

<第3段階>

規範を守ることが正しいから、規範を守る

この道徳性の段階をもとに、児童の規範が大切だと考える理由を分類した。すると、規則尊重・公德心に関するアンケートの回答には、「ルールを守らないと、けがをしてしまう。」「先生に叱られるから。」といった第1段階と考えられる回答が多く見られた。

思いやりに関するアンケートの回答には、「友達と協力することは大切だから」という回答や未記入のままの回答が多く見られ、なぜ大切なのか、分かっていないようだった。

また、「友達に協力すれば、自分も助けてもらえる」「友達に嫌われたくないから」といった、規則尊重・公德心と同様に、第1段階の回答が多く見られた。

そして、意識だけではなく、実際に規範を守った行動が取れていないと感じる場面に多々遭遇した。例えば、廊下を走ってしまう、チャイムの合図を守れないといった姿や掃除や当番活動といった決められた仕事をこなせないといった姿が見られた。

しかし、児童は教師の姿を見かけたり、注意されたりすると変わることができる。つまり、規範を知らないわけではないし、守るべきだということは知っていることが伺える。

以上のことから、本学級の児童の課題は、規範意識を育て、生活の中で規範を守ろうとする意識を高めることが必要だと考えた。

3 これまでの実践を振り返って

筆者は、規範意識の育成に関わって、2013年度、第4学年の担任していた学級を対象に、道徳の時間に体験活動を組み合わせることで、道徳の時間に感じたことを、実感させようという実践に取り組んだ。そうすることで、規範を守ろうとする態度が高まるのではないかと考えた。

道徳の時間では、「4-（1）規則の尊重」を扱う読み物資料を読み、きまりを守ることの大切さについて話し合わせた。体験活動として、その授業で感じたことを実感できるような場を設定した。その内容は、朝の会でどんなきまりを意識するか考え、帰りの会で振り返るという内容で1週間過ごさせた。1週間後に感想を聞くと、「決められたことをきちんとやったら、気持ち良かった。」「意識したらルールを守れたし、守ることの良さが分かった。」など、道徳の時間に感じたことを実感させることができた。

しかし、意識させていた期間はよかったものの、時間が経つにつれ、児童の意識が薄れていくという課題が残ってしまった。

規範を守ることが意識させられている間は、守ろうという姿が見られるが、特に声を掛けていないと、意識する姿が減ってしまう。それは、自分の意志で守るのではなく、人から言われたから守っている状態だからではないかと思われた。

II 研究主題の設定

1 研究主題

私は本校の概要、児童の実態、これまでの実践、を踏まえ、「児童の規範意識の育成ー規範に対する考えの深化と自己有用感の獲得を通じてー」を研究主題とした。

2 これまでの実践における課題

これまでに行った、規範意識の育成に向けた実践における、三つの課題を解決することが、規範意識の持続に迫れるのではないかと考えた。

一つ目は、道徳の時間において、児童の主題に関する、考え方を深めきることができなかったことだと考えられる。

筆者は今まで、読み物資料を扱う道徳の時間において、各場面での主人公の気持ちを想像させることで、主題に迫っていこうと授業を展開してきた。この展開では、資料から主題に迫ることがなかなかできず、価値の押しつけになってしまったり、教師が読み物資料の内容をまとめたりして、強引な主題の迫り方になってしまっていたと感じる。

つまり、道徳の授業後の日常での試行で「やらされている。」と、児童に感じさせてしまったから、体験活動で、良さを実感させることができて、「これからも続けよう。」という意識まで育てられなかったと考えられる。

二つ目は、体験活動が、試行したことを、自分自身で振り返るだけで実践が完了してしまっていた。児童は、規範を守ることの良さを何となく感じただけで終わってしまったのではないかと考えられる。

三つ目に、見通しの甘さを感じた。2013年度の実践においては、ルールを守ることの良さを実感することができれば、規範意識が高まり、行動にも変化が出てくるのではないかと考えていたが、それだけでは足りなかった。

そこで、これまでの課題を解決するための手立てとして、次に述べる先行研究を基に、今後の研究を進めていこうと考えた。

3 手立てに関わる先行研究

（1）道徳の時間における主題に迫る発問

規範を守る理由に関するアンケートから、本学級の児童の多くが、規範を守る理由は「先生に叱られるから守る」「友達に嫌われるから」といった、他者の存在が関係している。

そこで、なぜ規範を守る必要があるのかを、自分で探させることが必要だと考えた。そして、規範そのものの意義を理解させたい。

そのため、道徳の授業において価値の押しつけ、教え込みにならず、自分自身で規範を守ることの意味を考えさせることができるような授業展開が必要だと考え、発問を工夫しようと考えた。

永田（2011・2014）は「テーマ発問」を提唱している。「テーマ発問」とは、「資料の主題そのものにかかわってそれを掘り下げたり、追求したりする発問。人物の生き方や資料の全体や変化などに着眼して児童自身の考えを問うことが多い。」と述べており、私が今まで行ってきた、読み物資料の登場人物の心情からねらいに迫る授業に比べ、児童をねらいに近付けることができるのではないかと考えた。

また、加藤（2012）もねらいに迫るための発問として、「深く考える発問」を提唱している。この発問は、場面毎の登場人物の気持ちを想像させるのではなく、資料の全体を把握し、一つのテーマを追求していくものである。資料を通して、その行動に至るまでの心の動きも考えることができるだろう。

従来、道徳の授業において、登場人物の心情を問うことで、主題のよさを感じさせる授業が一般的とされてきた。その授業に対し、永田、加藤の提唱する道徳の授業における発問は、資料から、「（登場人物が）なぜそのような行為を取れたのか」「なぜ〇〇は大切なのか」といった発問をすることで、主題の意味を考えさせる発問と言える。

（２）規範意識と他者との関わり

規範意識の低下の原因について、滝（2005）は他者と関わろうとする感情が乏しいことと述べている。地域のつながりが薄くなることで、児童は他者に関わることに對する好意的な思いや、集団において、社会的な役割を果たすことによる自分への自信や誇りを得る機会が減少し、規範意識が育まれにくくなっているという。

そこで重要になってくるのが、他者との関わりである。滝は、自分が集団の中で、存在することを認められていると感じた後、集団から必要とされている、誰かの役に立っているという自己有用感が獲得されたとき、規範意識が育まれていくと述べている。

自己有用感を獲得させるためには、栃木県総合教育センター（2013）によると、貢献・承認・存在感の三つの要素が重要であると指摘している。この三つの要素は次の通りである。

【資料３ 自己有用感の構成要素】

貢 献	他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという実感。
承 認	他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという実感
存在感	他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感。

所属する集団において、存在感が高まれば、貢献しようという意欲が高まる。そして、貢献したことを承認されると存在感が高まる。こうすることで、自己有用感が獲得されると考えられている。

以上のことから、三つの構成要素を高める活動を行い、自己有用感を獲得させることで、規範意識を育てていくとともに、規範を守ろうとする行動にも表れてくるのではないかと考えた。

III 研究の内容

1 研究仮説

研究主題に迫るために、先行研究を踏まえ、以下のように仮説を立てた。

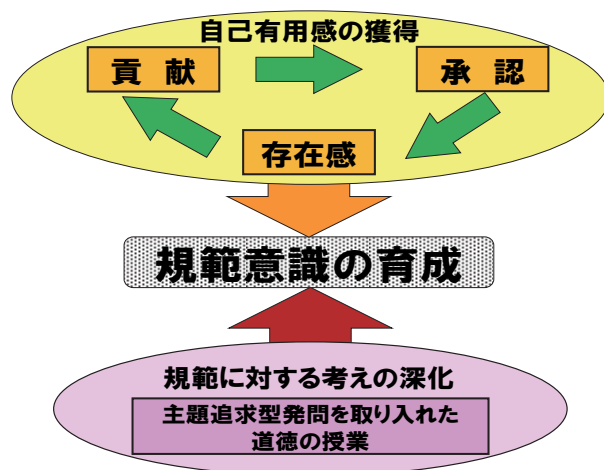
<研究仮説>

次の二点に着目した実践を行えば、児童の規範意識が育っていくだろう。

- （１）主題追求型発問を取り入れた道徳の授業を行うことで、規範に対する考えを深めさせる。
- （２）貢献・承認・存在感を感じられる学級活動を行うことで、自己有用感を獲得させる。

上記の仮説を踏まえ、次の研究構想図を考えた。

【資料４ 研究構想図】



2 研究の対象

6年2組40人（男子20人・女子20人）

3 研究の手立て

（１）主題追求型発問を取り入れた道徳の授業

主題追求型発問を取り入れることで、児童が今までもっていた考えに、新たな視点や考え方を与えることで、規範に対する考えを深めていく。

そこで、以下のように授業計画を立てた。

【資料５ 主題追求型発問を取り入れた道徳の授業計画】

資 料	内容項目
お客様	4－（１）遵法、公德心、 権利・義務
お話タイム	1－（３）自由・規律
正幸フォーメーション	2－（３）信頼・友情

規範の中でも、規則尊重・公德心・思いやりの項目が、自覚と実践の差が大きかったので、この二つの項目について、重点的に扱うこととした。

(2) 自己有用感を獲得させる特別活動

日常的な活動や行事を活かした取り組みを通して、貢献し、承認され、存在感を感じさせ、自己有用感を獲得させる。

① がんばりチェックカード

週の初めに学級のためにできることを考え、目標を設定する。そして、二人組を作り、1週間の様子をチェックし、評価し合う。

② 運動会を成功させよう

学級目標をもとに、運動会における、クラスのスローガンを作成し、共通の目標を意識させるとともに、身近なものとする。

そして、スローガンを達成するための目標を設定させ、取り組ませる。

運動会后、組体操や騎馬戦でペアを組んだ友達と手紙を交換し合う。

4 検証方法

主題追求型発問を取り入れた道徳の授業と自己有用感の獲得が、児童の規範意識を育成する上で有効であったか、次の方法で検証する。

- ・ 道徳の授業における発言内容や児童の感想
- ・ 規範意識に関するアンケート

(2015年4月・7月・11月)

- ・ 児童の行動観察
- ・ 自己有用感尺度

(栃木県総合教育センターが作成したもの)

IV 研究の実際

1 1学期の実践

道徳の授業では、規範を守ることがなぜ大切なのかを改めて考えさせる。

主題追求型発問を取り入れた道徳の授業を行い、児童が学んできたことに新たな視点や考え方を与えることで、規範に関する考えを深めさせたい。

また、自己有用感を高める日常実践として、ペアによる「がんばりチェック」活動を行う。この活動は、貢献し友達から承認されることで、自分の存在感を高めていく。そうすることで自己有用感を獲得させようと考えた。

(1) 授業実践 道徳(平成27年6月3日)

① 資料について

お客様(『小学校道徳読み物資料集』文部科学省2011年)

② 授業について

A ねらい

本学級の児童は、ルールを守ることがなぜ大切か、自分の考えをもっていない児童が多い。そこでまずは、ルールを守ることの大切さについて話し合わせようと考えた。また、自分の考えをもっている児童の多くは、ルールを守るとは自分にとってためになると考えている児童が多い。以上のことから、ル

ールは、他者(友達)に対する思いやりを示したものであることに気付かせることで、ルールを守って過ごそうという態度を育てたいと考えた。

イ 実践における工夫

＜心情を問う展開の授業における主発問＞

ショーが終わった後、主人公はどんな気持ちになりましたか。

＜主題追求型発問での主発問＞

きまりはなぜあるのだろうか。

心情を問う展開の授業では、他のお客さんの係員に対する態度のひどさから、主人公が嫌な気持ちになったことに気付くだろう。そうすることで、みんなが楽しむためには、ルールやマナーを大切にしないといけないという展開になるだろう。

しかし、他の人が嫌な気持ちになるから、ルールやマナーを守ろうということは、改めて扱わなくても、児童は分かっているはずである。そこで、ルールとは、一人の人だけががまんするのではなく、みんなでがまみを分け合うものだということに気付かせるような授業展開を考えた。

③ 授業の様子

導入で楽しい遊園地の様子を想起させてから資料を読むことで、遊園地なのに、楽しげな様子じゃないことに気付かせた。

その理由を考えさせていくと、「きまり」がキーワードとして挙がった。そこで、次の発問をした。

T: 遊園地には何できまりがあるんだろう。

C: けがしないように、安全に。

C: 多くのお客さんがいるから、多くのお客さんが事故にならないように、一人ひとりががまんして減らしていくことが大事だから。

T: 遊園地の人はがまんさせたの？

C: 少しは我慢してもらわないといけないのでは？

T: お金払っているのに？

C: 逆に他のお金払っている人もいるんだから。

T: 全員お金払っているからがまんしないといけない。つまり、遊園地で多くのお客さんが事故に遭わないようには、がまんしなくちゃいけない？

C: お金を払っているのはみんな同じだから。本当は平等にしないでいいけど、それができないから、ルールを作った。

T: 平等？

C: みんなが楽しめるようにしないといけないけど、それが不可能だから、少しでも可能にするためにルールがある。なるべくみんなが平等に楽しめるための工夫がルールだと思う。

児童は、みんなが平等に、少しずつがまんをするための工夫が、ルールだという考えが見られた。

以上から、たとえお金を払ったお客だからといって、何でも許されるわけではないということに気付くことができた。また、授業後の児童の感想には、次のような記述が見られた。

【資料6 児童の感想】

全員がお金を払っているんだから、みんなが十分に楽しむのは無理だけど、できるだけ楽しめるように、守るものは守らないといけない。

お金を払ったから何でもゆるされるわけではない。ぼくは、たとえお金を払っていても、係員の言うことはちゃんと聞きたい。

こうした記述からも分かるように、ルールは自分だけが守っているのではなく、みんなで守ることを分け合っていると、ルールに関する考えを深めることができたと感じた。

(2) 授業実践 道徳(平成27年6月26日)

① 資料について

お話タイム『明るいこころ6年』愛知県教育振興会 2011 年)

② 授業について

A ねらい

児童は自由という言葉を好む。しかし、児童は、自由と自分勝手は違うことに気付いていないようだった。そこで、自由だからといって、自分勝手に過ごしていいわけではないことに気付かせることで、他人のことを考え、より良い自由な時間を過ごそうとする態度を育てる。

I 実践における工夫

＜心情を問う展開の授業における主発問＞

大声で話しているグループに対して、主人公はどんな気持ちになりましたか。

＜主題追求型発問での主発問＞

自由を維持するのに大切なことは何でしょう。

心情を問う展開の授業では、自由といっても、羽目を外しすぎると、他の人たちに迷惑をかけてしまう、だから、もう一度自由について考えなおそうという主人公の姿から、自分たちも自由だからと言って何をしてもいいわけではないことに気付かせるという展開になるだろう。

しかし、自由といっても、何をしても良いわけではないことは児童も知っている。そこで、主題追求型発問をすることで、自由と他人との関係に気付かせることで、節度のある自由の大切さに気付かせるという展開を考えた。

③ 授業の様子

資料を読むことで、児童は自由だから何をしてもいいわけではないということに気付いていた。

自由なのに制限があるという矛盾を解決するために次の発問をした。

T: 自由なのに、静かにしなくてはいけなかったのですか？

C: 自由なんだけど、周りの人に迷惑だから、もう少し静かにしないといけないと思う。

T: 自由なのに？

C: 自由なんだけど・・・

T: 自由なのに、相手のことを考えないといけないの？

C: 自由は自由だけど、自分だけがうるさかったらいけないと思う。自分だけが自由というわけではなくて、周りのみんなにも自由がある。今回の話だと、うるさくしていたあきおさんだけが自由で、他の人は自由とは言えなかったんじゃないかな。

このように、児童は、自由は自分だけでなく、周りも自由だということに気付くことができた。

そこでさらに、自由とはどんな時に与えられるのかを考えさせることで、本当の自由に迫れるのではないかと考え、次の発問をした。

T: 自由を守ったり、それを広げたりしていくにはどんなことが大事だと思う？

C: きまりを守ること。

T: 自由なのに？自由の中にもきまりがあるってこと？きまりがあるって自由なの？

C: 自由は全部自由じゃないから、ちょっとはがまんしないと。

C: 自由に話す時間だから、自由に話せる環境をつくらないと。

T: 環境っていうのは？

C: みんなが自由に話せるってこと。

C: きまりを守るっていうのは、自由とは少し違うかもしれないけど、大切な気がする。自由はみんなもある、という思いやりの心が大事。

この授業展開により、自由を守る上で大切なのは、周りへの思いやりだという考えが広まっていった。

その後、児童に、「自由というのは信頼と天秤に掛けられている」という筆者の実体験を踏まえた話をした。すると、自由に対する考えの深まりが、授業後の児童の感想からも見られた。

【資料7 児童の感想】

自由って、自分一人が自由ではなく、他の人も自由だから、まわりのことを考えなきゃいけない。

自由を楽しむには、信頼されることやみんなのことを思いやることが大切だということが、よく分かりました。

そのほか、児童の感想には、「自由でも、少しは守ることを守らないと、きまりが増えていき自由が減

っていくから、きまりを守っていった方が、自分にとってもいい。」というような感想が多く見られ、児童は、自由だからといって、何もかも好き勝手やっていいわけではないということや自由を守るためには、周りへの思いやりや周りからの信頼が必要だということに気付いたように思われる。

(3) 日常実践

主題追求型発問を取り入れた道徳の授業を行い、規範についての考えを深めつつ、日常実践を行った。内容は、児童が二人組になり、学級の為に自分に何ができるかを考え、1週間の目標を設定し、ペアで共有させた。1週間、目標が達成を目指して過ごした後、自己評価を行うと共に、ペアの友達からコメントをもらう、という取り組みを行った。

児童の目標設定の様子を見ていると、「掃除を頑張りたい。」「当番の仕事を欠かさず行いたい。」といった記述が見られた。

【資料8 児童が作成したカード】

【資料9 友達からコメントをもらう様子】



友達からコメントをもらった児童は、笑顔を浮かべ、自分のがんばりを認められたことに喜びを感じているようだった。

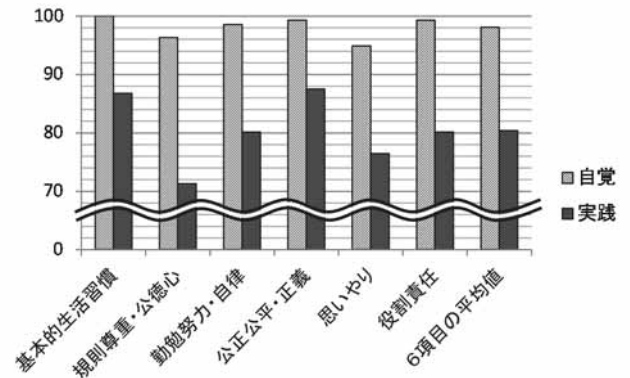
(4) 1学期実践のまとめ

① 児童の変容

アンケートを行ったところ、自覚に関しては、満点に近いままで、ほぼ変化は見られなかった。

しかし、実践に関しては、4月のころと比べると、自分から進んで行動しようという姿は若干増えたように感じた。そこでアンケートを取り、規範の6項目の平均値を4月と比べてみたが、変化はあまり見られなかった。

【資料10 規範に関するアンケート結果(2015年7月)】



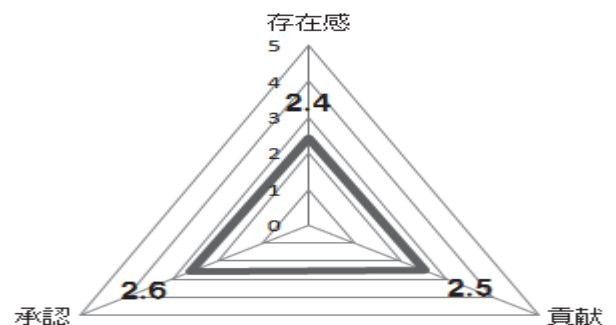
しかし、理由については、「叱られるから」といった第1段階の回答が減り、「ほめられたい」「友達に信用されたい」といった第2段階の回答や、「他の人に迷惑をかけることはいけない」といった第3段階の回答が見られた。

このことから、規範に関して、人に言われるから守ろうとするのではなく、自分自身のために規範を守ろうという気持ちが高まったのではないかと考えられる。

中には、4月に「叱られるのが嫌だからきまりを守る」と答えていた児童が、「信頼がなくなるからきまりは守らないといけない」と答えているように、第1段階から第3段階まで上がっている児童もいた。規範に関する考えの深まりを感じた。

また、自己有用感を構成する三つの要素について、アンケートを取り、栃木県総合教育センターの尺度で測ると、次のような結果が出た。

【資料11 自己有用感の獲得度合(2015年7月)】



栃木県の平均値が、承認 (3.8)、貢献 (3.5)、存在感 (3.1) であることを考えると、本学級における自己有用感はかなり低いことが分かった。

児童は規範の大切さを深く考えることができるようになって、実践に表われてこないのは、自己有用感の育成が不十分だったからではないかと考えた。

② 1学期実践の成果と課題

ア 主題追求型発問を取り入れた道徳の授業

(a) 成果

従来の道徳授業「この時の気持ちは？」といった、答えが狭まってくる発問ではなく、「〇〇とは

何（どういうこと）だろう」「なぜだろう？」といった発問を増やし、考えが深まるようにしたこと、児童の規範に関する認識が「守らなければ罰せられるもの」から「親や友達、先生に心配をかけたくない、信用を失いたくない」といったように、規範に関する考えが深まっていった。

(b) 課題

児童から多くの意見が出て、最後に「それで？」という反応になってしまうことがあった。意見が多様に広がった場合に、広がったままになってしまったことが課題である。

一方、多様な意見が出るなかで、意見が言えない児童もいた。こういった児童も意見が言えるような手立てを取り、児童一人ひとりが意見を交流することで、考えを深めることが大切だと感じた。

イ 自己有用感を獲得させる特別活動

(a) 成果

友達から温かい声を掛けられることに喜びを感じているようだった。友達から承認されるために、やるべきことはやろう（自ら規範を守ろう）という態度が育ってきているように感じた。

(b) 課題

決められたことをきちんとやろうとする様子（規則尊重・役割責任）は見られたが、学級をよりよくしようという姿までは見られなかった。一部の友達としか交流がもてなかったため、自己有用感の獲得にあまり結びつかなかったと感じた。

2 2学期の実践

1学期の反省を踏まえ、2学期は存在感を感じさせることから始め、自己有用感を獲得させる。

運動会を活用した実践では、スローガンを作成し、目標を身近なものにさせる。そして、その達成のために自分にできることを行うことで、学級における存在感を高められるだろうと考えた。存在感を高める事で、学級の為に貢献したいという気持ちが自然に湧き出るようにさせる。そして、お互いに承認させることで、自分の存在を感じさせるとともに、また貢献したいと思わせる。そうすることで、自己有用感を高めていきたいと考えた。

主題追求型発問を取り入れた道徳の授業では、運動会後という時期を生かし、いいチームとは何かを考えさせる。それにより、協力することの良さを感じさせることで、貢献したいという気持ちにつながるのではないかと考えた。

(1) 授業実践 学級活動（平成27年9月7日）

児童一人ひとりに存在感を感じさせるため、運動会において、クラスで一つのスローガンを決め、共通の目標を設定することにした。

まず、学級目標にある「一致団結」とは何かを児童に考えさせた。

T：一致団結するとはどういうことですか？

C：みんなで協力すること。

C：みんなで力を合わせて、一つの目標に向かって頑張ること。

T：みんなのイメージは、力を合わせるってことだね。じゃあ何のために力を合わせるの？

C：赤組に勝つため。

C：組体操を成功させるため。

C：思い出を作るため。

T：え？力を合わせなくても、一人ひとりが頑張ればいいんじゃないの？

C：励まし合えると、一人で頑張るよりも、もっと頑張れる気がする。

C：失敗した時とか、落ち込んでいる時、声を掛けてもらえると、次がんばろうって思える。

このように、何のために力を合わせるかを確認した。さらに、スローガンをより具体化させるために、次の発問をした。

T：運動会は、どうなれば成功って言える？

C：組体操を成功させることかなあ。

T：どうなれば組体操は成功って言える？

C：お客さんを喜ばせる。

C：できなかったことをできるようになる。

C：失敗しても最後まであきらめない。

T：なるほど。これらは全部組体操に関係するよね。運動会全体としては？

C：みんなが協力できた。

T：みんなが協力できればいいの？

C：笑顔で終わる。

C：赤組に勝つ。

この話し合いを通じて、運動会を成功させることについて、具体的にイメージをもたせることができた。そして、成功させるためにどうすればいいか、話し合いをさせた。

スローガンは「楽しくカツ丼」に決まった。みんながイメージする成功の中でも、特に思いの強かった、「楽しむ」と「勝つ」が入っているし、親しみやすいという理由である。このようにみんなで共通の目標を立て、その達成を目指すことで、児童一人ひとりに存在感を感じさせられるようにした。

(2) 日常実践

スローガンの達成のために、一人ひとりに1週間の目標を設定させた。そうすることで、自分がクラスのためにどんなことをして貢献するか、意識しながら毎日を過ごさせるようにした。

児童はスローガンを達成するために、自分に何ができるかを考え、目標を立て、毎日を過ごしていた。カードには次のような記述が見られた。

【資料 12 児童の作成したカード】

運動会を成功させよう！

学年のスローガン

楽しくカツ井

自分は何をする？

勝つために努力をし、楽しくやるために、協力
賛えをはげしくできるように努力する。
声はやくはしたり、力をつける

がんばって良かったこと？

わざとめられたこと。

こうすると、もっと良かったこと？

いやらしい人にとめられ、もてうまく
いったと思う。

カードからうかがえるように、児童はスローガンを意識しながら過ごすことができた。また、児童の反省に対して、教師が励ましのコメントや頑張りを認めるコメントをすることで、クラスの為に頑張っているという貢献感を実感できるよう努めた。

実際に、毎日の練習では、自分にできることは何かを意識しながら練習に取り組んでいた。また、運動会当日、本学級は騎馬戦で負けてしまった。その後の雰囲気はとても暗かった。しかし、ある児童が「このままだと、組体操は成功しないよ。気持ちを切り替えないと。」と、他の児童に呼び掛けていた。運動会の成功に向けて、自分にできることをしようとする姿の表れだと感じた。

この一言でクラスの雰囲気も変わり、無事組体操を成功させることができた。

(3) 授業実践 学級活動(平成27年10月6日)

運動会が終わった後に、組体操や騎馬戦と一緒に組んだ友達に感謝の手紙を書かせ、交換させた。手紙を書くことで、友達に支えられている、友達がいたから運動会を成功させることができたということを感じさせようと考えた。

児童は、友達のことを思い考えながら、真剣な表情で手紙を作成していた。以下のものが児童の作成した手紙である。

【資料 13 児童が作成した手紙】

3人わさのときに、みこうさでござんてく
れてありがとう。し。は。い。したときも
たいじゅうぶ？とかやさしく声をかけ
てくれたときなんかホッとしましたよ。
これからよろしくね！騎馬戦のとき
本番でまけて、教室でないたりしたけど
とペアでよかった
より

このように、児童は、運動会で友達に支えてもらった感謝の気持ちを言葉にすることができた。

その後、手紙の交換を行うことで、自分のがんばりが友達から承認されていることに気付かせ、学級における存在感を感じさせようと考えた。

手紙をもらった児童は、喜びの表情や照れたような表情を浮かべながら手紙を読んでいた。

その後、感想を聞くと次のような回答があった。

【資料 14 児童の感想】

助け合ったり、辛いときに「大丈夫？」と声を掛け合ったりしたから、組体操が成功したと思う。

勝つことはできなかったけど、みんなで勝利に向かってがんばることができて良かった。協力や団結の意味が分かった気がする。

一致団結したことを、運動会だけじゃなく、残り半年の小学校生活でも生かしていきたい。

児童は、「みんなで勝利にむかってがんばって良かった。」というように、自分も勝利に向けて努力できたという貢献感を得ることができたようだった。また、手紙をもらうことで、自分の頑張りを認めてもらえたという承認感を得、一人ひとりが学級における存在感を感じることができたと考えられる。みんなが目標を意識したからこそ、この感想のように、協力の良さを実感した言葉が出てきた。

児童は、運動会を通じて、協力することの良さや大切さを感じるとともに、自己有用感を獲得することができたようだ。ただ、今回は「運動会を成功させる」という目標があったから、協力ができたのではないかとも感じた。そこで、なぜ協力しようという気持ちが生まれたかを考えさせることで、日常から協力し合おうという気持ちを高めようと考えた。

(4) 授業実践 道徳(平成27年10月8日)

① 資料について

正幸フォーメーション(「はじめての道徳教科書」育鵬社2013年)

② 授業について

A ねらい

運動会において、友達同士助け合ったり励まし合ったりする姿が見られた。そこで、いいチームとはどんなチームか、日川高校を参考に考えさせることで、6-2もいいチームであることに気付かせる。また、いいチームとは、一人ひとりの努力の上に成り立っていることに気付かせることで、学級のためにできることをがんばろうという気持ちを高める。

イ 実践における工夫

<心情を問う展開の授業における主発問>

シュートが決まった瞬間、正幸くんはどんな気持ちになったでしょう。

<主題追求型発問での主発問>

いいチームとはどんなチームですか。

心情を問う展開の授業では、正幸くんがゴールを決めた瞬間の気持ちを想像させることで、みんなが助けてくれたから、シュートを決めることができた、という気持ちに気付かせることで、協力の大切さを訴えるという展開が考えられる。

そこで、今回主題追求型発問をすることで、なぜチームメイトが協力したのかに着目させた。そうすることで、仲間の協力は正幸くんが誰よりもがんばっていたから、それに応えようとした結果生まれたものである、つまり、協力というのは、一人ひとりがチームのために力を尽くすから生まれるということに気付かせようと考えた。

ウ 授業の様子

児童は、資料を通して、日川高校というチームの素晴らしさを感じ取ることができていた。そこで、いいチームとはどんなチームか具体化させるために次の発問をし、話し合わせた。

T: いいチームってどんなチームだと思いますか。

C: 失敗しても、励まし合えるチーム。

C: 強いチーム。

C: みんなが支え合うチーム。

(つぶやきで) ちょっと違う。

C: チームみんなで努力してる。だからみんなで支えられている。

T: みんなで努力するってどういうこと？

C: みんな・・・が努力する

C: 支え合うことも必要だけど、自分でも努力する姿があると思う。

C: チームメイトとも協力し合って、自分でも努力して、そういう気持ちがみんなにあったからこそできるチームワークがあったから、この話で言う正幸くんの学校みたいな、いいチームができたと思う。

この授業を通して、いいチームとは、一人ひとりが貢献するからこそ、お互いに承認し合おうという気持ちが生まれ、チームワークが出来上がるということに気付くことができた。

感想には、「運動会での6-2は、このチームに負けないくらい、いいチームだった気がする。」と書く児童もいた。また、「クラスみんなが努力し合うから、お互いに支え合っているようなクラスにしたい。」といった感想も見られ、いいチーム像が思い浮かんだようだ。

(5) 2学期実践のまとめ

① 児童の変容

運動会が終わった後の児童の姿に、学級の雰囲気を持ち上げるために、率先して声を掛け、みんなで遊ぼうとする姿や困っている友達に、優しく接している姿などが増えてきた。

これは実際に見られた姿だが、ある児童が、授業中に指名され発言できずに固まっていたときに、「がんばれ！間違えても大丈夫だよ。」と励ましていた。この励ましていた児童は、どちらかといえば、周りのことを気にせず、自分勝手なふるまいをすることの多い児童であった。そんな児童が他人に優しくしていることに驚きを覚えた。

これは、学級において「友達の力になりたい」「友達に認められたい」といった自己有用感の高まった姿ではないかと感じられた。

② 2学期実践の成果と課題

ア 主題追求型発問を取り入れた道徳の授業

(a) 成果

「いいチーム」とは何かということを考えることはできた。一人ひとりがチームのために自分の力を出すことが大切であると分かったようだった。

(b) 課題

「いいチーム」とは何かということは理解できたが、実際に自分がクラスのために何ができるかを考えさせることができなかった。自分たちに何ができるか、話し合わせる場面を作るとよかったと感じた。

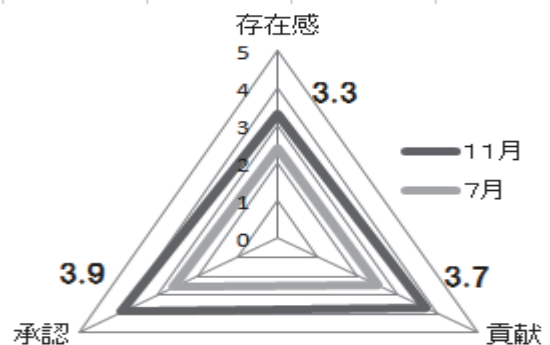
イ 自己有用感を獲得させる特別活動

(a) 成果

存在感から感じさせることで、児童が貢献したいという気持ちをもちながら、貢献することができた。

また、意欲的に取り組んだあとで承認し合うことが、自己有用感を高める上で有効だったと考える

【資料 15 自己有用感の獲得度合 (2015 年 11 月)】



存在感・承認・貢献のいずれの項目も1回目の調査に比べると、1ポイント近く上がっていた。

(b) 課題

貢献させるための手立てが不十分だった。目標を立てることも、行動に移すことも児童に任せてしまったため、目標を立てても、実践できているかどうか判断することができなかった。中には、目標を立てただけで終わっていた児童もいた。他者との交流の中で、貢献をする場を設定したり、承認し合う場をもう少し細かく設定したりし、友達が見てくれている、認めてくれているという感情を日常的に感じさせるべきだった。

V 研究のまとめ

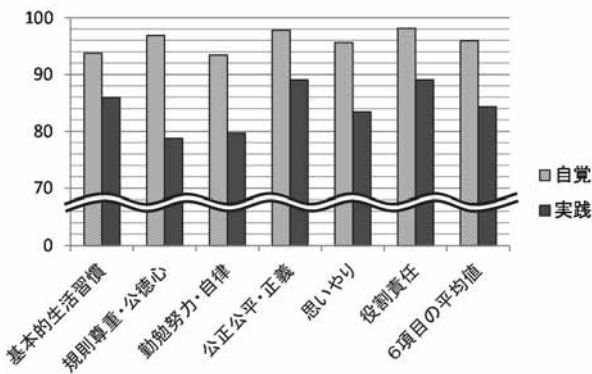
1 研究の成果

主題追求型発問を取り入れた道徳の授業を行い、一人ひとりが主題について深く考えることで、児童の規範に関する考えを深めることができた。

また、貢献・承認・存在感を感じさせることで、自己有用感を獲得することができた。

この2つの実践を行うことで児童は、与えられた仕事をこなす姿や時間を守って行動する姿など、規範を守ろうとする行動が増えてきた。アンケートを行ったところ、次の結果になった。

【資料16 規範に関するアンケート結果(2015年11月)】



規範の6項目の平均で見ると、数値の上昇は5%程である。しかし、項目ごとに見ていくと、「規則尊重・公德心」「思いやり」「役割責任」の3項目で、規範を守って実践できていると答えた児童の割合が10%近く上昇している。これらの項目は、規範を守らないと周囲に迷惑が掛かったり、規範を守ることによって学級に貢献できたりするものである。つまり、自分の行動が、他者に影響を与えるもので、自己有用感が高まったことが行動に表われているのではないかと考えられる。

また、事前のアンケートで、特に結果の低かった二つの項目において、規範が大切だと考える理由を見ると、次の表のような結果だった。

【資料17 規則尊重が大切な理由】

	実践前	実践後
A児	叱られるのが嫌だからきまりを守る。	信頼がなくなるからきまりは守らないといけない。
B児	それがルールだから。	みんなが気持ちよく過ごせるように、きまりは守るべき。
C児	きまりを守らないと怒られる。	みんなが同じようにがまんしていることだから。

規則尊重の項目は、実践前と比べると、第1段階の児童が減り、第2段階の児童が増えた。さらに、第3段階の児童も現れた。

なぜきまりを守ることが大切なのか、児童一人ひとりが、考えをもつことができたようだ。

中には、実践前に、規範がなぜ大切か、その理由が書けなかった児童が、実践後には、「信頼されるためには、きまりを守ることが大切。」と規範に対する考えを、深めることのできた児童もいた。

【資料18 思いやりが大切な理由】

	実践前	実践後
D児	嫌われたくないから。	自分が助けてもらったことがあるから、助けたい。
E児	みんながやっているから手伝う。	友達に励ましてもらって、うれしかったから。
F児	ほめられたいから協力する。	友達と助け合うと、苦しいこともがんばれる。

一方、思いやりの項目は、第3段階の児童が大きく増えている。これは、児童が授業で感じたことを、実生活で実感させられたことが原因だと考えられる。

このように、どちらの項目も、全体的に段階が上がっている。これは、規範に関する考えが深まると共に、自己有用感を獲得し、他者に認めてもらいたいという感情が高まったことが原因だと考えられる。

2 今後の課題

一方、規範を守れていないと考えている児童や実践が継続しない児童も存在している。その児童は、自己有用感が低かったり、道徳の授業後の感想において、資料を読んだ感想を述べたりして、規範に関する考えに深まりを感じなかった。

このことから、今後の課題として、自己有用感を獲得させる手立ての改善、主題追求型発問で全員が積極的に授業に参加でき、考えを深められるような工夫が必要だと感じた。

そして、規範の項目の中でも「基本的生活習慣」「勤勉努力・自律」は、あまり変化が無かった。これは、他者との関わりが影響しない、「自分自身の問題」であるからだと考えられる。「自分自身の問題」をいかに、児童に自分の問題としてとらえさせるかが大切だと感じた。

これらの課題を解決し、児童の規範意識がさらに育つよう、今後も支援していきたい。

<引用・参考文献>

加藤宜行 (2012)『道徳授業を変える教師の発問力』東洋館出版
木暮聡美 (2012)「児童の規範意識に関する調査研究」群馬県総合教育センター <http://www2.gsn.ed.jp/houkoku/2012c/12c01/index.html> (平成27年1月30日閲覧)
小寺正一 (2001)『道徳教育を学ぶ人のために』、世界思想社
滝充 (2005)「規範意識の形成と教師の指導力」『C S 研レポート』vol. 55、教育研究所
栃木県総合教育センター (2013)『高めよう！自己有用感』
永田繁雄 (2011)『「場面発問」だけの授業から脱却する』『道徳教育』2014年4月号、明治図書、73-75
永田繁雄 (2014)『「テーマ発問」の広さを改めて整理する』『道徳教育』2014年2月号、明治図書、73-75
永田繁雄 (2014)「道徳授業の発問を変える『テーマ発問』とは」『道徳教育』2014年8月号、明治図書、4-6
文部科学省 (2012)『文部科学省白書』日経印刷